

藍住南小学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

・学習指導要領を踏まえた指導方法と評価の工夫改善
・「主体的・対話的で深い学び」の実現

校長

元木誠子

学力向上推進員

城所絵里

【小中連携における共通の取組】

ICTの効果的な活用と話し合い活動の充実により、児童生徒の学力向上を図る。

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取り組み状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○漢字・計算やICTの基礎的・基本的な技能について、学年相応の力が付いてきつつある。 ●語彙力が乏しく、読解力や聞き取る力、文章を書く力が不足している。 ●読書量が少なく、選ぶ本も偏っている。	①語彙数が増え、正しい言葉や漢字で読んだり書いたりすることができる。 ②学年に応じた原稿用紙の使い方を知り、文章を正しく書くことができる。 ③各教科の単元テストで、低学年は8割以上の児童が正答率80%、中・高学年は7割以上の児童が正答率75%を超えるようにする。	①学習タイムや授業の中で繰り返し、漢字・計算やICTの基礎的事項を取り入れ、定着を図る。 ②低学年は、視写教材を使用する。また、作文帳による日記指導やNIEを取り入れることで、作文の基礎的事項の定着と、授業の中で学習したことを生かす力をつける。 ③音読・計算や週末読書、NIEを継続的に取り入れ、読解力や語彙力を養う。国語の授業で学習する並行読書の本を準備し、読書環境を整える。	①校内でICTの体系表を作り、各学年が目標を達成できるようにする。 ②学年に応じて作文(日記)の手引きを作成し、児童がいつでも確認できるようにする。 ③図書委員会が読書ビンゴ(分類番号ごと)を催したり、図書室で読み聞かせをしたりするなど、読書に親しめる環境を整える。	①漢字・計算やICTの基礎的・基本的な技能については学年相応の力が付いてきた。 ②作文(日記)の手引きを作成しているが、「」や段落の表記の仕方等、基礎的事項がまだ不十分な児童が多い。 ③図書委員会が分類番号で本を借りたり、読み聞かせをしたりするなどの環境を整えたため、読書に親しむ機会が増えた。しかし、週末読書や朝読などは、学年によって差が見られた。読書量も減っている。	①授業の指導の中で、漢字・計算やICT活用の基礎的事項を継続して行う。 ②作文帳で日記を書くことは、継続的に行うが、基礎的事項が定着するように繰り返し指導する必要がある。また、NIEも引き続き取り入れ、読解力と文章を書く力を育てる。 ③分類番号で本を借りたり並行読書をしたりする機会を増やす。読書量を増やすために朝読の時間や週末読書は学校全体で必ず実施できるよう呼びかけを行う。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○学年の発達段階に応じて少しずつICTを活用できるよう取り組んでおり、高学年は、スピーチや発表、振り返りなどで、ICTを効果的に活用することができている。 ●全体の中では自信が持てず、自分の考えを表現できる児童が少ない。	①目的に応じて、理由を明らかにしながら、自分の考えや思いを適切に文章に表現することができる。 ②他者の考えと自分の考えを比べながら聴き、考えをまとめたり伝えたりすることができる。 ③磨いたことや伝えたいことを、適切な音量や速さで話すことができる。	①様々な形態で話す場を多く設け、話す経験を多く持たせる。 ②思考を整理するツールとして、ICTやホワイトボードを活用していく。 ③理由を添えて自分の考えを述べたり、学びの記録を残したりするためにノートも活用していく。	①については継続して行う。 ②ICTについて職員研修を行い、学習指導に効果的に活かす。 ③「ノートの書き方の例」を効果的に使う。	①様々な形態で話す場面を多くし、話す経験を多く積み重ねることができた。 ②思考を整理するツールとして、ICTやホワイトボードを活用することを試みた。 ③「ノートの書き方の例」を活用し、自分の考えをまとめたり、学びの記録をノートに残したりすることが習慣として、身に付いてきた。	①児童の実態に応じた話す場の工夫が必要。また、話し方の型を示すなど、児童が安心してのびのびと表現できる手立てを構築していく。 ②ICTに偏らず、ホワイトボードやノートなどのアナログツールも実態に合わせて活用する。ICTの活用例や教育アプリについての教員研修を行う。 ③本年度、身に付きつつある、ふりかえりの習慣を今後も継続できるように支援する。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ほとんどの児童が「あいなん学習ルール」を意識して行動できている。 ●ふりかえりの際に、単純な表現で終わってしまう児童もいる。 ●自主学習について定着はしつつあるが、取り組み方に差がある。	①単元ごとのふりかえりを学年に応じた形で行うことによって、主体的に学習することができる。 ②辞書を積極的に活用して、学習に活かすことができる。 ③自分のめあてを持って自主学習に取り組むことができる。	①学年の実態に応じたふりかえりの手引きを作成し、単元や授業のふりかえりをさせる。 ②8年生から個人持ちの辞書を活用させることで、言葉に関心を持たせる。 ③「自主学習のめあて集」や自主学習ノートの例を配布し、活用することで、主体的に学ぶ習慣をつけさせる。	①ふりかえりをしたことを見返せるようにし、次時への学習への意欲を持たせる。 ②③については継続して行う。	①授業のふりかえりは、発言・ノート・タブレット等を使って、学年に応じてできている。 ②3年生から個人用の国語辞典を活用できている。 ③発達段階に応じて、自主学習に取り組んでいるが、内容については個人差が大きい。また中には、家庭でのゲームや動画の視聴時間が多く、読書や家庭学習が極端に少ない児童がいる。	①②については継続して行う。 ③年度初めに全学年、学力に関する実態調査(家庭学習の時間やゲーム・動画を視聴する時間などを問う)を行い、児童や保護者に家庭学習の大切さを啓発する。